第 29 回 CT サミット参加報告

札幌医科大学附属病院　小倉圭史

2026 年 7 月 25 日（土）、新潟市の朱鷺メッセ新潟コンベンションセンターで開催された「第 29 回 CT サミット」に参加しました。今回のテーマは「ONE FOR ALL, ALL FOR ONE ―患者に寄与する CT 技術―」。新潟県では初めての現地開催となり、全国から約 230 名が参加されました。2021 年にも新潟開催が予定されていましたが、新型コロナウイルス感染症の影響により Web 開催となった経緯があり、今回ようやく新潟での開催が実現したとのことです。

CT サミットは、CT の祭典であり、CT の最新技術を学ぶだけではなく、全国の施設で行われている工夫や課題を共有し、日頃の業務を改めて振り返ることのできる場だと思います。



受付を後ろから



受付を後ろから

プログラムは、フレッシャーズセミナー、基調講演、技術講演、ランチョンセミナー、特別講演、シンポジウムと幅広く、ポスター展示や機器展示も行われていました。CT-AEC などの基本的な撮影技術から、画像処理、心臓 CT、Dual-energy CT、Photon Counting CT まで、内容は盛りだくさんでした。

ポスター発表では、自由閲覧が始まる前に、発表者全員が登壇して、自分の発表を 1 分間で紹介する時間が設けられていました。短い時間で「どんな発表なのか」が分かるため、その後に見たいポスターを選びやすく、とても良い取り組みだなぁと思いました。



フレッシャーズセミナーでは、AEC の基礎的な内容が紹介され、撮影ピッチや寝台の高さ、上肢の位置、呼吸など、今一度ポジショニングの重要性を確認することができました。

基調講演では、画像処理ワークステーションを活用により業務効率化に関する報告が印象に残りました。人手不足や業務量の増加が課題となる中で、自動化できる部分は機械に任せ、診療放射線技師がより専門性を発揮できる業務に時間を使っていくという考え方は、今後ますます重要になると思います。

技術講演Ⅰでは、ECG-less Cardiac と Dual-energy CT についての講演がありました。

ECG-less Cardiac はかなり身近なものになりつつある。特に救急の現場では大きなメリットであり、時間の短縮と血管の拍動に対応した画像補正は、非常に有用な技術だと感じました。

Dual-energy CT では、骨髄浮腫の評価について紹介されました。Virtual non-Calcium（VNCa）画像の定量評価について、基礎的検討から標準化、さらに臨床応用に向けた取り組みまで講演されました。

対応可能なメーカーは限られるものの、Water-Calcium、Water-HAP などの定量指標を使用することで、年齢による影響も考慮した急性期椎体圧迫骨折（VCF）の評価につながる可能性を垣間見ることができました。

技術講演Ⅱ「画像計測で紐解く CT 技術の臨床応用」では、画像の解像度やコントラスト、ノイズを「何となく良い画像」として見るのではなく、実際に計測し、その結

果から臨床応用を考えていくという内容でした。特に Photon Counting CT では、高い空間分解能や低 keV 画像など新しい特徴がありますが、その性能を正しく理解するためには、MTF やファントムを用いた定量的な評価が重要であることが紹介されました。

特別講演では、慶應義塾大学医学部の陣崎教授からから「マルチポジション CT（Aquilion Rise）の開発と導入」について講演がありました。開発初期の秘話から苦労、立位や座位でも撮影できることで、嚥下、排尿、歩行、姿勢など、日常生活に近い状態で身体の機能を評価できる可能性が紹介されました。今後の CT 検査の可能性がさらに広がっていることを実感することができました。

今回、ランチョンセミナーでは 4 社から紹介された最新技術を通して、CT 装置だけでなく、日本と欧州の造影に関する違い、動きに対応した画像処理技術、検査ワークフローなど幅広い話を聞くことができた。





シンポジウムでは、CT 線量の継続的な評価とローカル DRL、診療放射線技師による静脈路確保、地域病院における冠動脈 CT の立ち上げ、救急 CT での STAT 画像所見報告や教育体制など、日常臨床に直結するさまざまな取り組みが紹介されました。内容はそれぞれ異なりますが、共通していたのは、「その技術や取り組みが、最終的に患者さんにどのようなメリットをもたらすのか」という視点だったように思います。新しい装置や技術を導入すること自体が目的ではなく、画質や安全性の向上、被ばくの最適化、検査時間の短縮、スタッフの負担軽減、さらには地域医療への貢献につなげていくことが大切です。今回のテーマである「患者に寄与する CT 技術」について、改めて考えるよい機会となりました。

そして、夜にはナイトセミナーが開催されました。新潟の有志の方々によるバンド演奏やクイズ大会など、趣向を凝らした企画が用意され、会場はかなり盛り上がりました。昼間の学術的な雰囲気とはまた違い、全国から集まった参加者が一緒になって楽しむ、とても印象に残る時間でした。こうした場だからこそゆっくり話すことができ、施設や地域を越えた交流を深めることができました。こうした「人とのつなが

り」も、CT サミットの大きな魅力の一つだと思います。



今回は講演や皆さんとの交流を楽しむあまり、参加報告を依頼されていたにもかかわらず、気がつけば写真をほとんど撮っていませんでした。これは今回の反省点です。

次回、第 30 回 CT サミットは札幌へ

次回の第 30 回 CT サミットは、2027 年 7 月 31 日（土）に札幌で開催予定です。テーマは、「温故知新 ―その先にある挑戦と冒険へ―」です。
開催に向けては、実行委員長の札幌医科大学附属病院 原田耕平さん、副実行委員長の札幌医科大学附属病院 大橋芳也さん、手稲渓仁会病院 板谷春佑さん、そして頼もしい実行委員の皆さんと力を合わせ、参加してよかったと思っていただける会にしたいと考えています。

これまで CT サミットで大切にされてきた技術や知識、人とのつながりを受け継ぎながら、札幌開催ならではの魅力も感じていただける、楽しく実りある会にできればと思っています。
ぜひ多くの皆さまに演題をご登録いただき、ご参加いただければうれしく思います。
実行委員一同、皆さまと札幌でお会いできることを楽しみにしています。

以上